

最終回 「昭和歌謡」の象徴・舟木一夫

いまだ現役で惜別を歌う

平成29年8月からスタートした当コラムは、今回が第150回、最終回となりました。

第1回に登場した読者アンケート「忘れられない青春の歌」第1位、舟木一夫のデビュー曲『高校三年生』は当然ながら高校生活への惜別を歌ったものですが、『修学旅行』『学園広場』なども、残り少ない卒業までの日々を歌った惜別ソングでした。

舟木はデビュー翌年の昭和39年、NHK大河ドラマ『赤穂浪士』に矢頭右衛門七役で出演、さらに昭和41年の『源義経』では平家の若武者、平敦盛を演じますが、どちらも10代半ばで非業の死を遂げるという役回りでした。

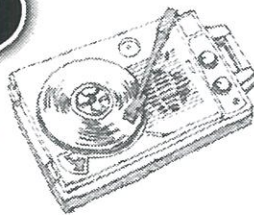
同じ昭和41年9月公開の主演映画『絶唱』（共演・和泉雅子）がこの年の興行収入2位という大ヒットを記録、悲劇の主人公を演じた舟木の評価は高まり、翌年も『夕笛』（共演・松原智恵子）で、夭折の青年を演じています。『絶唱』（詞・西條八十）の歌詞には

「死」の文字が記され、その前年のヒット曲『あゝりんどうの花咲けど』（詞・西沢爽）には「墓標」の歌詞が

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵 松本浦



登場、中学生だった私の目には、橋幸夫、西郷輝彦と比べ、「哀愁、翳り、別れ」を感じさせるスターとして映っていました。

昭和42年7月公開の東宝映画『その人は昔』（脚本と作詞・松山善三）では内藤洋子と共演、挿入歌『白馬のルンナ』を内藤が歌い、その可愛らしい歌声に、秋から始まったオールナイトニッポンにはリクエストが殺到しましたが、実はこの映画もまた、内藤の死で純愛が終わるといふ悲恋物語でした。

『その人は昔』の後、筒美京平ら新進歌謡作家による和製ポップスと入れ替わるように表舞台での登場が減少していくことになりましたが、それからおよそ40数年後、還暦を越えた舟木が甦ります。赤い詰襟姿で見事に復活、明朗さ全開のワンマンショーには舟木と同世代らしき女性が殺到、ファンは健在でした。

昭和38年6月のデビューからおよそ4年間で、舟木はシングル盤を46枚リリースし、13本の映画に主演しています。社会背景や娯楽の嗜好が異なる現在とは比較で



きませんが、青春歌謡から時代物歌謡、夏には橋や西郷とリズム歌謡を競い合い、歌謡映画で主演を務め、『雨の中に消えて』などのテレビドラマでも主題歌を歌い主役を張る、こうした足跡をたどっていくとき、舟木一夫こそGSと和製ポップスが台頭する以前の昭和歌謡を最もわかりやすく体現した歌手であることが確認できます。終戦8か月前に生まれ、いまだ現役として惜別を明るく歌い続ける舟木一夫、76歳。

日本が生まれ変わった戦後という時代を人に例えようと、東京五輪は一人前になったことを内外に表明した成人式であり、舟木の全盛期と重なる五輪前後は「戦後日本の青春時代」と捉えられるかもしれません。当時の若者が口ずさんだ青春歌謡とは人々の青春を謳歌していただけでなく、日本に若さがみなぎっていた昭和という時代の青春讃歌だったようにも思えるのです。

ポスト読者の皆様とは今回でお別れになります。『高校三年生』にあやかって「へ昭和歌謡はいーつーまーでーもー」で、お別れしましょう。ご愛読、ありがとうございました！

「昭和歌謡といつまでも」は今回で終了します。長い間ご愛読ありがとうございました。

ほりい・ろくろ 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。「しあわせになるうね 私的『昭和歌謡考』第4集」（グスコ出版）が好評発売中